

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20510226

研究課題名（和文）ベトナム国内での聞き取り調査によるベトナム戦争の記憶に関する研究

研究課題名（英文） Study on memories of Vietnam War in Vietnam

研究代表者

今井 昭夫（IMAI AKIO）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20203284

研究成果の概要（和文）：ベトナムの退役軍人の人たちにとってベトナム戦争の体験は民族共同体意識を強め、国民意識の浸透をもたらすものであった。また国内のさまざまな民族や地方出身者との交流を深めるもので、社会的地位上昇の機会でもあった。ベトナム戦争の記憶は、輝かしい勝利と戦死者への哀悼の記憶とともに、平等性と一体性を持った記憶であった。戦争体験は国民共通の経験という印象を創り出す一方で、実際には世代だけでなく社会階層や居住地域、さらには戦闘や空襲の有無といったことにより異なっていた。

研究成果の概要（英文）：I held 9 interviews in Vietnam focusing on the Vietnam War, and interviewed about 200 persons, mainly Viet Cong veterans. The experience of the war itself forged a national sense of community and helped in nation building. In their experience, the Vietnam War offered opportunities to promote exchange among various domestic ethnic groups or peoples who came from various provinces, as well as opportunities to rise in social status. Moreover, their memories of the Vietnam War included memories of shining victories as well as memories of condolences for persons killed in war, and served to foster a sense of equality and togetherness among war comrades. On the other hand, although the war experiences were shared by all Vietnamese people, individual experiences differed depending on generations, social strata, dwelling places, and so forth. Although the war involved the entire Vietnamese people, their war experiences were obviously not homogeneous experiences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：東南アジア、ベトナム、ベトナム戦争、戦争の記憶、オーラルヒストリー

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した背景としては、(1)「国民

国家の記憶」のプロジェクトと、(2) オーラルヒストリー関連のプロジェクトに参加

し刺激を受けたことが挙げられる。

(1) 国民国家の記憶

本研究代表者は以下の科学研究費補助金の研究プロジェクトに参加し、国民国家の記憶のあり方、とりわけ戦争の記憶と国民国家の形成の問題に関心をもつようになった。①「近代国民国家形成における国民的『記憶』の総合的研究」(平成11年度～平成14年度)。②「東アジアにおけるグローバル化の新段階の学際的研究」(平成12年度～平成14年度)。③「ベトナム戦争後のベトナムにおける戦争の記憶の総合的研究」(平成16年度～平成19年度)。

(2) オーラルヒストリー

本研究代表者は、21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」(平成14年度～平成18年度)に研究分担者として参加し、オーラルアーカイブ班に所属した。この研究班で精力的に行なったオーラルヒストリーに関する研究会のお陰でその手法について学ぶことができ、ベトナム戦争についての聞き取り調査に着手する直接的契機となった。

学術的な背景としては次のようなことがある。冷戦終了後、「戦争の記憶」の問題は東アジア・東南アジアにおいて大きな論争を呼び起こす問題として浮上してきた。日本においても従軍慰安婦問題や歴史教科書問題などが世論をにぎわしたことは記憶に新しい。「戦争の記憶」はグローバル化が進展する中で、新たなナショナル・アイデンティティを呼び覚ます手立てとなり、国内政治のみならず国際政治をも規定する重要な要因となってきた。しかるにアジアの国々の国内において「戦争の記憶」がどのように生成・展開してきているのかを調べた本格的な研究は存外少ない。本研究は、ベトナムにおける「戦争の記憶」を研究し、その空白の一部を埋めようとするものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ベトナム国内においてベトナム人がベトナム戦争をどのように記憶しているのかの聞き取り調査を通して、(1)「低い位置の視線」からベトナム戦争を歴史的に再検討し、(2)ベトナム戦争後の兵士の復員状況や「戦後処理」を明らかにし、(3)ベトナムでの「戦争の記憶」のあり方がどのようなものであり、戦後ベトナムにおいて如何なる政治史的・精神的意味をもって来たかを辿ろうとするものである。これによってベトナム現代史におけるベトナム戦争の影響の様相を具体的に提示し、現代ベトナム地域研究に寄与しようとするものである。また、他の国々の戦争の記憶のあり方と比較する

ことによって、「戦争の記憶」研究一般にも学術的に貢献することを目指している。以下では各側面についてももう少し詳しく述べる。

(1) この側面は、ベトナム戦争そのものの歴史的研究の側面である。ベトナム戦争のオーラルヒストリーといってもよい。従来、日本におけるベトナム戦争研究は、国際関係論・国際政治学畑の出身者によって主に担われてきた。それらは概して俯瞰的な視角からの研究で、ベトナム共産党や国家の政策論的研究が主であったといえる。本研究では日本のベトナム戦争研究ではほとんど使用されてこなかったオーラルヒストリーの手法を用いて、「低い位置の視線」からの研究を目指す。

(2) 2番目の側面は、ベトナム戦争後の兵士の復員状況や「戦後処理」についてである。復員、顕彰制度、軍人恩給などについての研究は日本では皆無に近い。

(3) 3番目の側面は、ベトナムの「戦争の記憶」のあり方についてである。これについての代表的な研究書としてはフエ・タム・ホー・タイ編『記憶の国』(2001年)があるが、大きくドイモイ以前と以後に分けられて議論されている傾向があり、ある意味で大雑把である。日本やベトナムではまとまったこの手の研究書は出版されておらず、研究の空白となっている。ベトナム人の意識の中でいまだに大きな影響力をもつ「戦争の記憶」を理解できなければ、現代ベトナム人、現代ベトナム社会を十分に理解することはできないであろう。

3. 研究の方法

本研究期間中にベトナム国内の9か所で「解放勢力側」退役軍人を主に約200人にベトナム戦争に関する聞き取り調査をすることができた。

(1) 聞き取り調査：本研究の方法は聞き取り調査に基づくオーラルヒストリーの手法である。ベトナム国立社会学研究所の協力をえて、各地の退役軍人会と連絡をとり、10～20人の退役軍人や青年突撃隊の元隊員を紹介していただき、聞き取り調査を実施した。インタビューはできるだけ聞き取り調査対象者の自宅で行なうようにしたが、退役軍人会の事務所で行なうことも多かった。インタビューは一人当たりだいたい小一時間で、研究代表者と協力者の社会学研究所研究員の二人でベトナム語によって実施した。質問票は使用せず自由質問形式で聞き取りを行なったが、定番となっている質問事項は二人の間で了解しあっており、あとはインタビューによって柔軟に対応した。インタビュー

一に許可をえた上で、インタビューは録音し、後にテープ起こしし、文字資料化した。

(2) 聞き取り調査のまとめ：聞き取り調査を行なった地方で出されている資料等も収集につとめたほか、地方史や戦史の資料を参照しながら、テープ起こしした資料を論文・研究ノートにまとめた。

4. 研究成果

(1) 本研究期間中にベトナム国内の9か所で聞き取り調査をすることができた。調査地は2008年度の①フエ市、②クアンガイ省、2009年度の③ターイグエン省、④クアンビン省、2010年度の⑤ハノイ市、クアンチ省、2011年度の⑦ビンフオック省、⑧ハノイ市、2010年度の⑨チャーヴィン省である。

(2) これらの調査から、史実としては、以下のような点が明らかになった。①ベトナム戦争中のいわゆる「解放勢力側」では、主力軍、地方軍、民兵、青年突撃隊、民工などの多様な人民動員が行なわれていたこと。②多様な人民動員には待遇の違いが、戦時中そして戦後にも厳然として存在していたこと。③民兵は無給であり、青年突撃隊・民工はごくわずかの給料で動員され、また人民は無償で労働力や家財を軍隊に提供しており、「ボランティア」戦争の面が濃いこと。④南北分断国家となっていたが、暫定的軍事境界線を越えたヒトの動きが結構活発であったこと。⑤北部出身の兵士が南部に本格的に投入されるようになったのは1960年代後半以降で、メコンデルタにはテト攻勢の時期を除くと71・72年頃からであること。⑥南ベトナム解放民族戦線は南部における戦闘主体ではなかったこと。政治的にはベトナム労働党南部中央局が、軍事的には南ベトナム解放軍が主体となっていた。⑦少数民族の戦争参加度は温度差があるが、戦争はかれらにとって「国民化」の大きな契機となっていたこと。

(3) 戦争体験の意義や戦争の記憶といった点からは以下のようなことがいえる。いわゆる「解放勢力側」の人々にとってベトナム戦争体験は民族共同体意識を強めるものであり、「国民」意識の浸透をもたらす過程であった。退役軍人の人たちにとってベトナム戦争の体験は、国内のさまざまな民族や地方出身者との交流を深めるもので、社会的地位上昇の機会でもあった。またベトナム戦争の記憶は、輝かしい勝利と戦死者への哀悼の記憶とともに、戦友たちと艱難辛苦を共にした平等性と一体性をもった記憶であった。戦争体験や戦争の記憶は、ベトナム「国民」意識を浸透させたり民族共同体意識を強めたりしたが、それは必ずしも均質的なものではなく、

多様性をもっていた。地方、民族、宗教などによって戦争参加への温度差があったことは否定できない。戦争は国民全体を巻き込んだものの、その体験には濃淡があり均質的な現象ではなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

①今井昭夫、ベトナムにおける抗米救国抗戦の記憶—ベトナム国内・退役軍人たちの聞き取り調査からの素描、東京外大 東南アジア学、査読有、第18巻、2012、55-70

②今井昭夫、「手に鋏、手に銃」「手に網、手に銃」—旧北ベトナム・クアンビン省の元民兵たちが語るベトナム戦争、東京外国語大学論集、査読無、84号、2012、325-340

③今井昭夫、敵が破壊しても、われわれは進む—ベトナム北部ターイグエン省退役軍人達の戦争の記憶、東京外国語大学論集、査読無、83号、2011、363-382

④今井昭夫、ベトナム戦争中における南部赴任幹部についての考察、東京外国語大学論集、査読無、82号、2011、383-396

⑤今井昭夫、旧南ベトナム・軍事境界線地域のベトナム戦争—チティエン軍区・解放勢力側戦士への聞き取り調査、東京外国語大学論集、査読無、81号、2010、417-433

⑥今井昭夫、ベトナム南部ベンチャー省でのベトナム戦争—元ベンチャー省隊・参謀長ファン・ディン氏へのインタビュー、東京外大東南アジア学、査読無、第15巻、2010、69-81

⑦今井昭夫、旧北ベトナム・西北地方在住少数民族のベトナム戦争参加—ムオン族とターイ族への聞き取り調査から、東京外国語大学論集、査読無、79号、2009、1-20

〔学会発表〕(計1件)

①今井昭夫、ベトナムにおける抗米救国抗戦の記憶、第4回国際ベトナム学会議、2012年11月27日、ベトナム社会主義共和国ハノイ市

〔図書〕(計1件)

①今井昭夫・岩崎稔編、御茶の水書房、記憶の地層を掘る—アジアの植民地支配と戦争の語り方、2010、266

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 昭夫 (IMAI AKIO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・
教授

研究者番号：20203284